

人口構造 および 転入・転出に関する追加資料

1 福井市の人口の推計

- (1) 国立社会保障・人口問題研究所(社人研)による福井市の人口推計
- (2) 年齢3区分別人口の推計
- (3) 人口ピラミッドの変化

2 県外転入・転出の現況

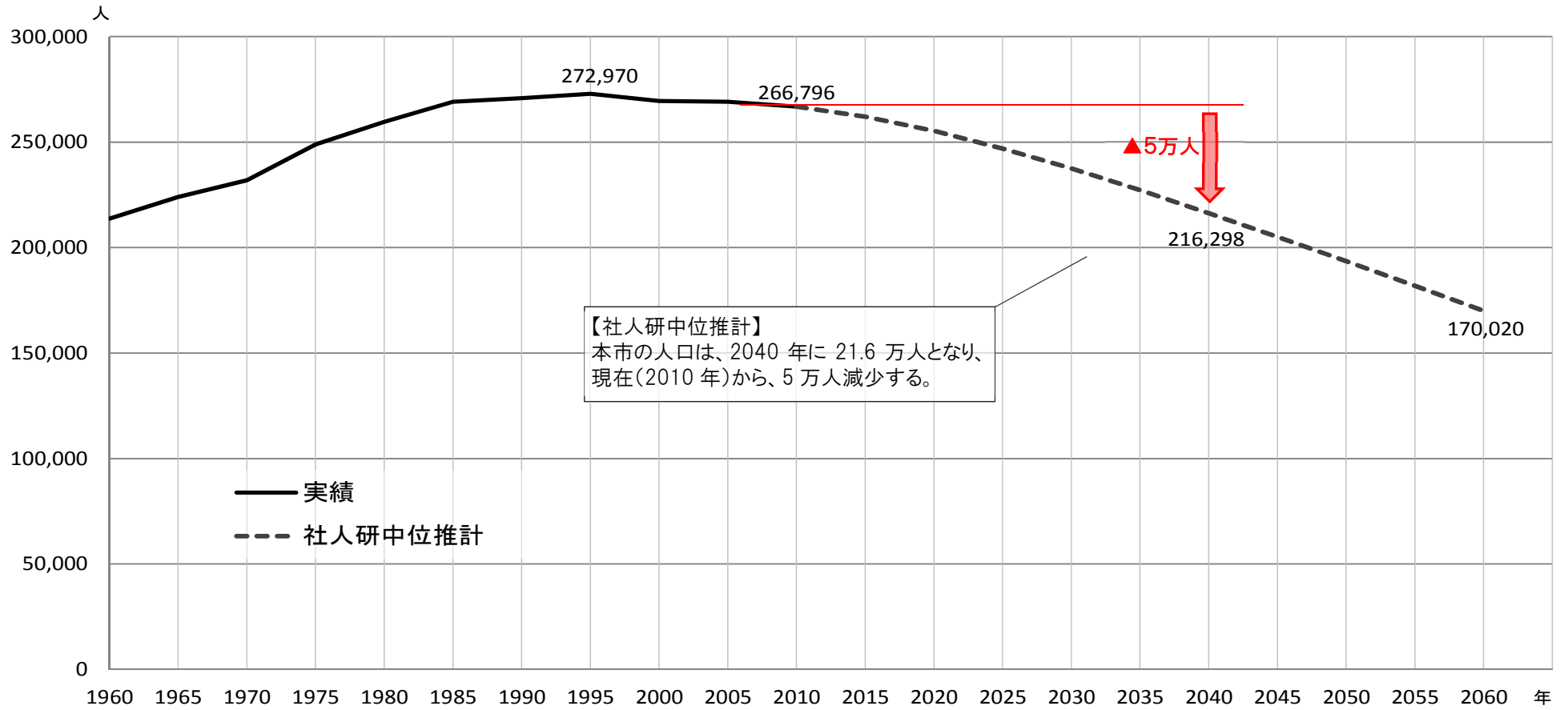
- (1) 年齢別 県外との転入・転出数 (H24、H25 の平均)
- (2) 転入・転出の相手先都道府県 (H24、H25 の平均)

3 県内転入・転出の現況

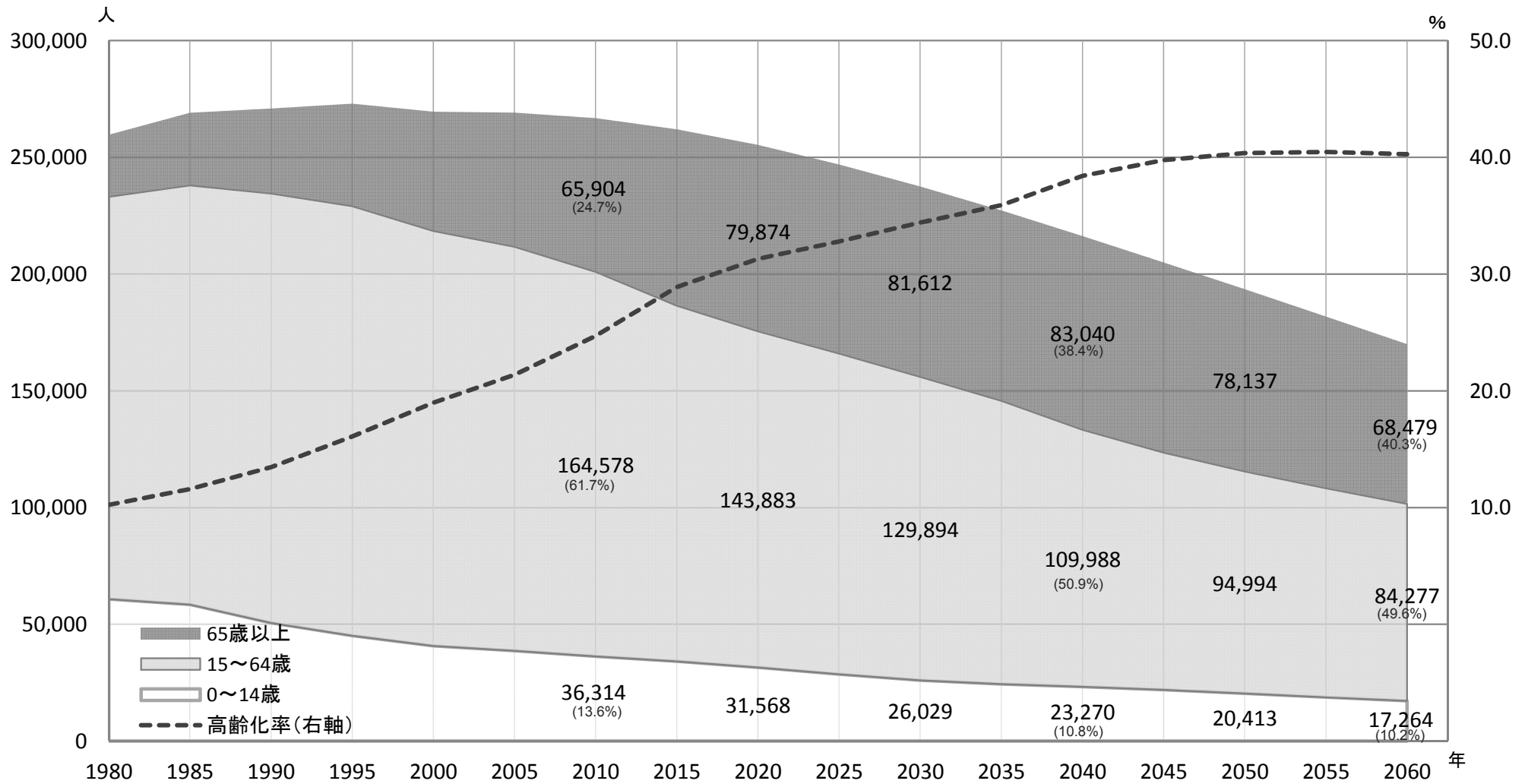
- (1) 県内他市町との転入・転出

人口構造 および 転入・転出に関する資料

(1) 国立社会保障・人口問題研究所(社人研)による福井市の人口推計

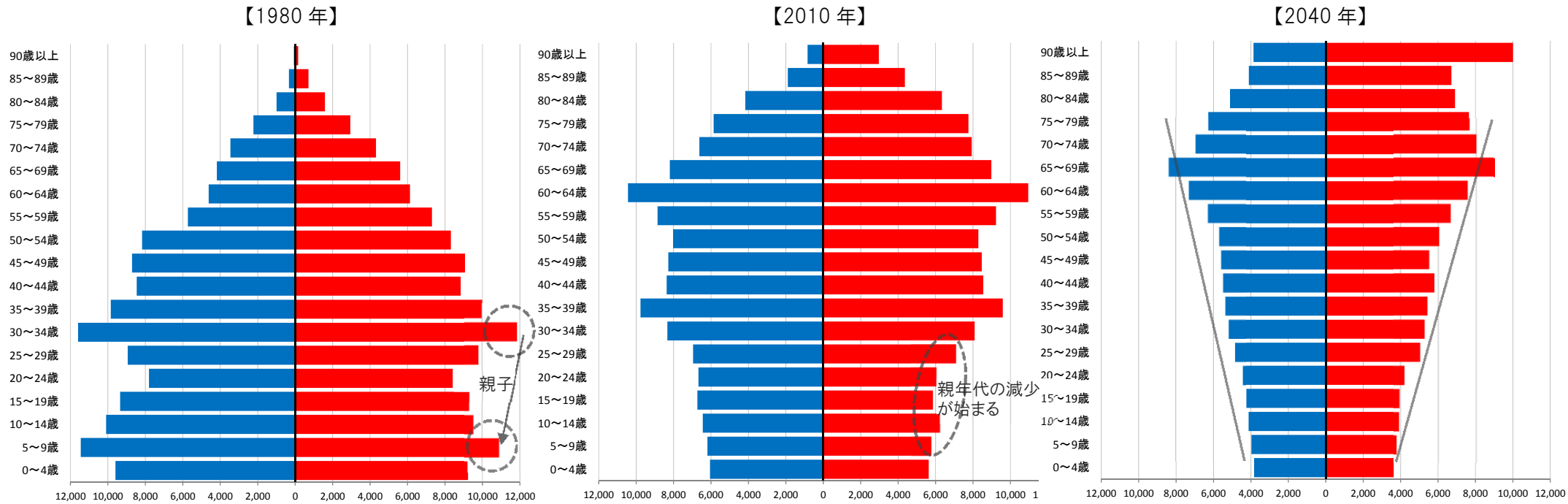


(2) 年齢3区分別人口の推計



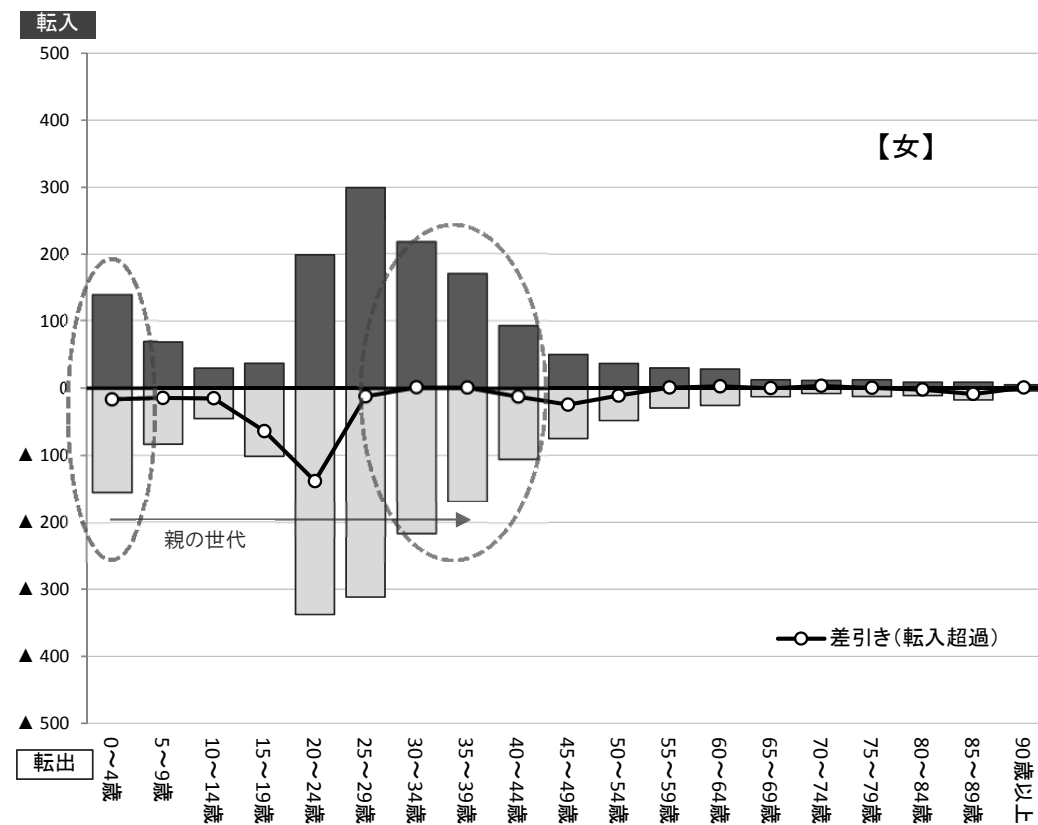
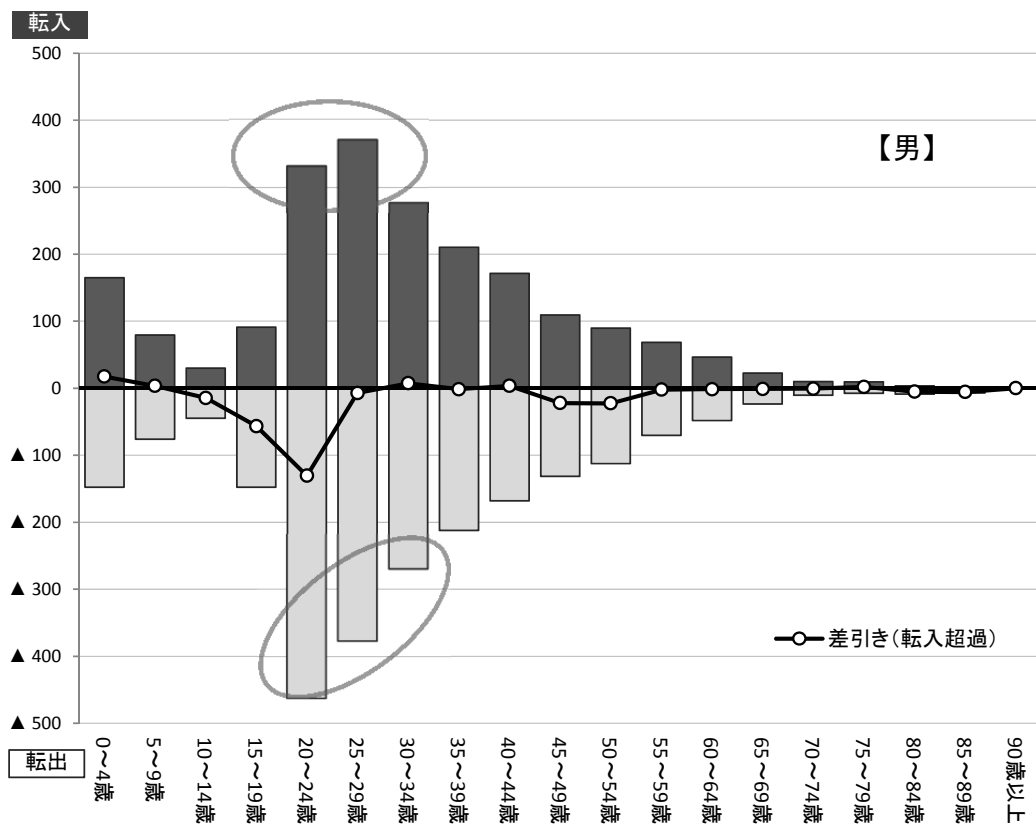
- ・生産年齢人口(15～64歳)は、2040年には、現在から5.5万人減少。生産年齢人口の減が、5万人の総人口減少の全てと言っても過言ではない。
- ・年少人口(0～14歳)も減り続け、2040年には、1万人の減。現在の7割程度となる。
- ・高齢化率は上昇し、将来的に40%高止まりする。しかし、高齢者の実数は、2020年以降、増加傾向が緩やかになり、均衡。2040年の8.3万人をピークに、減少する。

(3) 人口ピラミッドの変化



- ・1980年には、親の年代と同等数の子の数が見られる。
- ・2010年には、次の親年代となる子どもの数の減少が始まる。
- ・2040年には、もはや、人口「ピラミッド」の形ではなくなっている。
- ・低い出生率により、子の世代が増えない、また、それら少ない子が親になるとき、さらに子の世代が少なくなるなど、年齢層が下がるにつれ人口が減る構造が顕著となる。
- ・一方、高齢者の割合は増えるが、65～69歳の階級をピークに、それ以下の階級全てで人口が減少するため、高齢者数も減少局面に入ってくる。

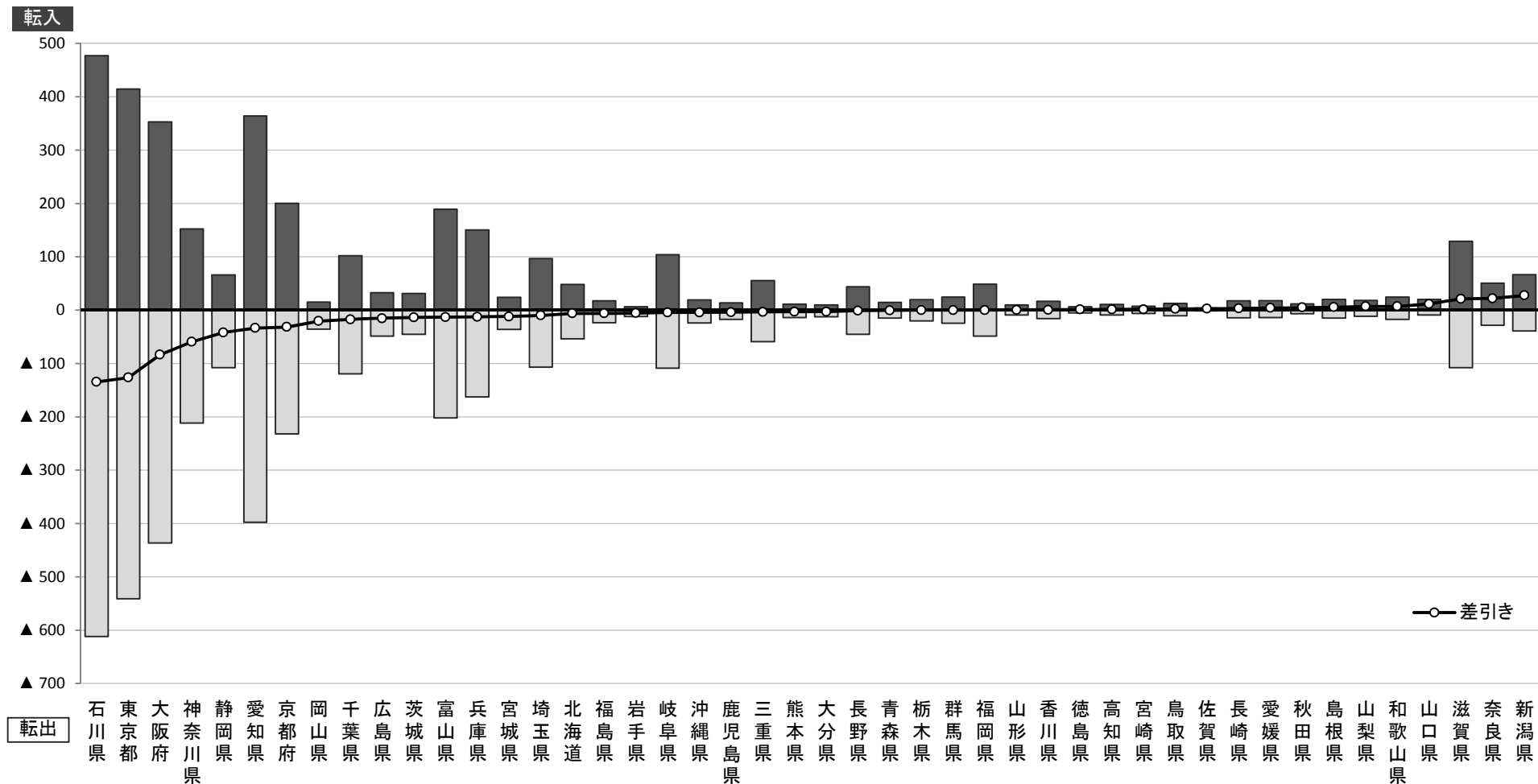
(4)年齢別 県外との転入・転出数 (H24、H25 の平均)



- ・男女ともに、大学進学または卒業・就職時の、県外転出が顕著である。(住民基本台帳ベースのため、15～19歳の転出は、実態よりも少なく表れている。)
- ・他の年齢層では、転入・転出が均衡している。また、転入出そのものの実数も少ない。
- ・30代、40代で、比較的、転入・転出が均衡しているのは、都市圏⇄福井市の転勤により、人が入替わった(転入転出がセット)だけのケースが一定程度含まれているものと考えられる。0～4歳の移動が大きいことから推定できる。
- ・転入、転出ともに、20～34歳の年齢層で、男性の移動が多い。
- ・転入-転出差引き(転入超過)について、男女で大きな差異はない。
- ・20～24歳の男女の転出を比較すると、転出者数は女性の方が少ないが、転入転出の差引き(転出超過)は男女の差がないことから、割合としては、女性は県外へ転出すると戻ってこない傾向が高いといえる。

(5) 転入・転出の相手先都道府県 (H24、H25 の平均)

・下のグラフは、本市からの転入元・転出先を、転出超過の大きい都道府県順に並べたものである。



・首都圏、中京圏、近畿圏との転入、転出が、社会動態のほとんど全てを占めている。

・中でも、東京都、大阪府、愛知県、京都府は、転入出のボリュームと転出超過数双方の影響が大きい。

・大都市圏以外では、石川県、富山県のボリュームが大きい。富山県は転入・転出が比較的均衡しているが、石川県は、大幅に転出超過となっている。

(6) 県内他市町との転入・転出

